

平成 27 年度上半期が終了して

今年もまもなく 11 月となり、農作物の出荷も終盤を迎えようとしています。今年度の山形県産農産物は春先のさくらんぼから始まり、果実・野菜がそれぞれ異なる状況下で出荷・販売されることになりました。

今年度を振り返ると、天候が大きく出荷に影響した上半期であったように思われます。3 月 23 日に東京で桜の開花宣言がなされて以来、4 月～5 月には真夏とも思わせる高温が続きました。その後 6 月 8 日から始まった関東の梅雨は 7 月 19 日まで続き、7 月 17 日の台風 11 号上陸を皮切りに、多くの台風が発生しては日本列島を縦断しました。農作物は変化に耐えられず生産量が前年比を下回り、結果として市場では入荷量減、単価高の展開となりました。

卸売市場においても 4 月から 9 月までの上半期は単価高に恵まれ、野菜は前年比 109.8%、果実は 100.0%、全体では 107.1%でありました。長いこと前年比を上回ることが出来なかった市場業界も、一息付いているところです。

しかし、本当にこれで良かったのでしょうか？あまりにも農産物が高騰すると消費者は野菜離れを起こしてしまいます。栄養価をサプリメントで補ってしまう人も多くなるでしょう。青果物の消費減退、販売不振、価格低迷、生産意欲の低下、の悪循環が発生してしまいます。青果物の市場全体が活性化するためには、なによりも安定生産・安定供給が重要なのです。

近年は情報化が進み短期、長期の気象情報も入手出来き、栽培方法も作型や種苗によって選択が出来ます。必ずしも今までのような形にこだわることなく栽培が出来るではないでしょうか。毎年同じ様な気候条件はありませんし、異常気象は当たり前と考えましょう。極端な例になりますが、植物工場での安定的な供給が出来ればそれに転換されることも考えられます。近年、大手企業が農業に注目していますが、情報技術を導入した新たな担い手による組織的な農法も、安定生産のための選択肢になるのではないのでしょうか。

今後の気象予報は暖冬なのか寒波が来るのかまだ不透明ですが、予測をして農作業に携わって頂きたいと思います。

(金澤 誠 筆)